

.....
 シンポジウム

「トマス哲学の現代的意義」報告

司会 今道友信

I

昭和49年11月10日東京大学に於ける第23回中世哲学学会大会のシュムポヂウムは、その年がたまたま聖トマス・アクイナスの生誕七百年記念にあつたため「トマス哲学の現代的意義」といふ題のもとに、3人の提題者の討論を中心に展開された。

提題者は

「認識論と神学に関連して」 慶応大学教授 松本 正夫

「トマス哲学の現代的意義」 京都大学教授 山田 晶

「トマス倫理学の現代的意義」九州大学教授 稲垣 良典

の三氏であり、司会者は開催校東京大学教授・今道友信であつた。提題者の候補者はかなり早くに議せられたが、種々の理由のために、3人の提題者の決定がおくれ、提題者同志の事前の十分な打ち合はせは不可能であつた。その上、常任委員会の決定によつて開催校に一任された人選も、前年度大会のシュムポヂウム司会者稲垣教授が提題者に、同じく提題者であつた私が司会者に、前々年度のシュムポヂウム司会者山田教授が提題者に、また公開講演やシュムポヂウムに度々登場された委員長松本教授が提題者に、といふやうに、言はばシュムポヂウム常連の再参加のくり返しであり新鮮味に欠けた不十分な企画とみえたことは事実であらう。しかし、提題者3人は我が国に於けるトマス研究家として一流の学者であり、この人達はトマス七百年記念のシュムポヂウムとしては考へうるベストメンバーのひとつであることに疑ひはない。同一人物の再登場といふ批判を覚悟の上で、敢へて開催校の「最も定評あるトマスの研究家によるシュムポヂウムを」といふ考へに応じて下さつた上

記3人の提題者、並びに常識的な批判に停滞せず、討論を傾聴したこれに積極的に参加して下さった会員諸兄姉、及び全参会者に感謝する次第である。事実、3人の提題者は、各自の研究視野から巧まずしてもち出してきた討議内容によつて、経験と価値といふ二つの重要な問題を提供し、それによつて更に体系と歴史の扱ひ方が問題となり、満堂の参会者に時の経過を忘れしめた。それらの問題は、手慣れて時として爆笑を誘起するほどのレトリックの陰に一見看過されさうでもあつたが、熱心な空気の中で、司会者の脳裏にも、辛うじてつなぎとめることができた。その内容の重みは、以下に述べるやうにきはめて大きい。思ひ返して私はその夕べの意義をなつかしむ。

II 提題者の要旨

各提題者はそれぞれの発言の要旨を例によつて司会者の報告の後に、各自の筆になる小論文の形式で掲載してゐるから、それらを更にここで要約する必要はないであらう。しかし、現実に行なはれた討論に際しての発言の要旨は、その語調や力説の仕方により、客観的にまとめられた小論文とは必ずしも全く同一とは限らない。そこで私は司会者として聞き取つた限りでの印象を主にして、各提題者の提出小論文を参考資料とし、生きた討論の主軸となつた考へを各自についてまとめることから始めたい。

松本教授はトマスの「認識論と神学に関連して」トマスの創造の神学が人間の知識構成の機構を問ふ認識論に支へられてゐるといふ見解を明らかにすることによつて、存在の根拠と知識の根拠との関係を主題とする現代の哲学に対するトマス哲学の範型としての意義を明示しようとする。その際、松本教授は年来の主張に従つて、中世哲学にも認識のラディカリズムがあり、意識一般の自明性を疑つても疑ひ切れない直接所与に基づかしめたデカルトと、存在の形而上学を樹立したトマスとの間に何ら形式的な差異はないと考へる。つまり「知性が最も自明なものとして最初にとらへるところのものは存在である」(トマス『真理論』I a 1)といふ考へと、「私が考へる故に私が在る」(デカルト『方法叙説』I)といふ意識の自明性を主張する考へとは、その方法と形式を全く同じくし、ただそれぞれの解答内容が重点を異にするアクセントの差であると力説する。従つて松本教授によればデカルトの

方法論的マクシムはこれをトマスもマクシムとしてゐたことになり、デカルトを近代哲学の祖とすることはその限りでは正しくないことになる。

それではどこにデカルトとトマスの差はあるのか。松本教授は、そこに、ある意味では奇想天外とも言ふべき思惟祖型の対立といふ論理的対比を提出し、歴史的展開を世界解釈の対立に解消させようとする。絶対的な自覚意識に存在を担はせるデカルト的思考は、松本教授によれば近代的意識なのではなく、意識と存在の完全な自己同一である神からの世界の流出派生を説く新プラトン主義、を祖型とする世界観の論理的再組織にすぎない。これに対し、意識も存在のひとつにすぎないと見て、存在を意識する意識の存在は絶対に必要であるとするスコラ哲学的伝統は、トマスがその代表者なのであるが、アリストテレスに源を仰ぐものであり、本来のギリシア哲学を祖型とする考へ方であるといふことになる。つまり、松本教授の見解によれば、ギリシア哲学の中でもアリストテレスの存在論のみが正統なのであり、これによると存在一般の一部としてしか意識は認められてゐないので、自意識の持つ自明性は存在の自明性の一種にすぎないといふことになる。トマスはこの正統祖型の継承発展を完成した点にその論理的意味があり、それがひいては現代的意義に連なると考へられることになる。ここには二つの貴重な問題が提出せられた。ひとつは常識的な歴史記述に対する反論としての祖型対比による体系の価値比較といふ考へ方の提示であり、いまひとつは経験がその二大構成要素としての意識及び存在のいずれに重点をおいて考へらるべきであるかといふ経験論についての問題提出である。

山田教授は、「トマス哲学の現代的意義」を正当に扱ふことは次ぎの理由から不可能である、といふことを最初に力説した。その理由とは、トマス哲学の徹底的研究と現代哲学の徹底的研究を成し遂げた人でなければ、我々の課題は扱ひ得ないが、自らはトマス哲学研究の途上にあるにすぎないから、到底この任にたへない。それ故、問題を「トマス哲学研究の現代的意義」と変へて論じ進めたい、と声明した。私がかかる問題変容のみが唯一の可能な道とは思はないが、これはひとつの卓れた見識であると思ふ。そしてこのやうな問題視野において、山田教授はトマスの研究をあくまでも原典に忠実に進めながら、トマス哲学とそれ以後の近世哲学との間に、いかなる主題連関や断絶があるか、を明瞭に把握する歴史的研究の成果を期待して

ある。山田教授によるとトマスはそれまでの哲学的探究の諸結果の調和した宇宙であるが、それ以後の哲学はこの宇宙の分解による個別研究の偏重である。その結果、トマス以後の哲学史的展開は、自ら新しい体系を樹立したヘーゲルを除けば統一的理解に欠けてゐる。といふことは哲学史に関する全体的視野は今だにヘーゲル史学の枠を出てゐない、といふことに他ならない。従つて西洋哲学の全体を新たに見直して、トマスを黙殺したヘーゲル哲学史観とは異質の哲学史を成立せしめなくてはならない。ここに奇しくも、スコラ的トミストとしての松本教授と、同教授とは異質のトマス研究者としての山田教授とが、歴史記述の改革の必要性といふ点では、一致するのである。

けれども、山田教授は、松本教授の提出した祖型交換の考へ方、すなはち意識の哲学に対して存在の哲学を主張する態度には反対する。山田教授にあつては、思想史に於ける歴史の重みが忘れられない。松本教授に於いては「意識の哲学」とされたものを、山田教授は「主体の哲学」と言ひ、近世における主体の哲学の支へとなる自己の主体的経験とその反省が、その内部に於いて果たして経験として妥当しうるか否かといふことが現代において問題となり、単に内在経験にすぎなかつたところの所謂主体論者の超越拒否に対して、超越を含めての「全存在経験」を問題としてゐたトマスの哲学の研究が将来の哲学にとつて意味を持つ、と考へる。

稲垣教授は「トマス倫理学の現代的意義」といふ題のもとに、価値観の動揺してゐる現代の倫理的再建に対するトマス倫理学の積極的寄与を探究しようと試みた。それは結局倫理的規範の実状を探究する事実としての倫理学乃至は倫理学史ではなく、道徳の形而上学に他ならない。稲垣教授の指摘では、現代倫理学の課題は善の基礎づきの可能性をめぐるものである。トマスによれば、人間的行為に於いて追求すべき倫理的善は、人間の究極目的たる至福に基づくがそれは意志の自己原因性を破るものではない。つまり至福がカントのいふ欲求を引き寄せるかたちで意志を動かしてゐるのではない。「人間は至福を意志せざるを得ない」といふことは至福が意志を根拠づけるところの原因であるといふことに他ならない。といふことは、人間の自然的本性が至福に対応してゐることを意味するが、しかしいかなる道を通つてそこに到らうと努力するかといふ過程選択はハビトゥス形成を創造的に行なふ個人の決断による、といふことである。この考へに於いて明らかなことは、トマスに

於ける価値は、全人類的な超越方向の同一性とその具体的な現象としてのハビトゥス形成との総合に於いて成り立つものと見ることができる、と稲垣教授は理解してゐるといふことにほかならない。更に、教授の指摘によれば、意志は善を意志するのであり、意志が意志するが故に何物かが善となるのではない。従つて、悪とは当然かかる善に反するものとして、意志の自己原因性を基本的に方向づけてゐるところのこの高次の原因を否定することであり、意志が自らに内属する個有の原因性を至高のものとするに他ならない。ここでも、問題として価値とそれを実現しようとする意識乃至決断の主体が問題となつてをり、前二者と問題を共通にしてゐるのである。

III 討論とまとめ

3人の提題者はその豊富な発言内容を、満堂の出席者すなはち参加会員150名に加へて、尚100名近い聴講者の一般的理解に応じた話し方で、伝達しようとしたためもあつたかと思ふが、いずれもその持ち時間を超過し、司会者を困惑させた。しかし、司会者にとつては、内容もなく、発言も短くて、合ひの手に自分が多くを語らねばならないといふ程度の低いシュムポヂウムを受け持つことに比べれば、時の超過はものの数でもない。松本正夫教授と山田晶教授とは熱弁をふるひ、いずれも15分の超過をその意識なしに犯したが、それは言はば質問に対する答を、いまだ質問が出される前に、敢へて先取りして答へてみたと見ることもできる。

まづ提題者同志の相互質疑及び討論を、主体的意識乃至経験、それから価値、更にそれらの現代哲学に於ける意義に限つて展開するやうに試みた。その結果次の3つのことが明らかにせられた。即ち(1)松本教授はトマス哲学が中世哲学であると同時に永遠のスコラ哲学の典型であり、その現代的意義とは歴史的影響ではなく純粹に体系的是正にあるといふことである。その例としては、存在と本質との峻別であり、トマスが神の存在には自然的認識で迫まりうがその本質は自然的認識の枠外にあるとしてをり、そこに啓示神学の基本性を論理的に指摘する可能性がある、と認めた。(2)山田教授と稲垣教授は、もとより、トマス哲学の体系的意義を重視するものであるが、歴史的所産としてのトマス、価値観としてのスコラ学から切り離してその個人としてのトマスの哲学の研究が、現代の哲学的思索に、全体とし

てではなく個別的な問題として寄与する可能性があることを指摘した。その際山田教授はトマスの全存在経験の解明が哲学史全体の記述をヘーゲルの意識主義から脱却せしめるであろうと言ひ、トマス哲学の歴史的研究が、そのまま新しい哲学史の可能性につながることを明確にし、稲垣教授は現代倫理学の対立（分析論的見解と自然主義的見解の善についての矛盾関係）を問題意識に取り入れて、トマスの哲学を研究することによつてこの対立を止揚しうる可能性を論理的に明確にすることを介して、トマスのテキスト解釈が歴史性を失ふことなしに、現代哲学の問題となることを示した。(3) これら3人の相互に対立する見解にもかかわらず、現代的意義を問ふ場合、司会者がなかば即興的に選びとつたかに見えたかもしれないところの経験と価値意識のふたつの問題が、実は3人のそれぞれの視座から語られてゐたのであり、それが具体的に彼らの意見を形成することになつてゐるのである。といふことは、トマス解釈の歴史的な問題として、トマスにおける意識乃至経験とは何かといふ研究の必要性和、現代、我々が価値をいかに考へてゐるかといふ我々の体系的思索の必要性、これらふたつの課題が、トマス哲学の現代的意義を問ふ場合に、その立場が松本的であれ山田的であれ稲垣的であれの別を問はず、共通に与へられてゐるといふことになるであらう。

なほ会場の一般席からの質問や発言が多少あつたが、適切な発言があつても、それらについて充分の時間が残されてはゐなかつたので、討論として浮彫られるまでに至らなかつた。それは司会者の責任といふことでもあつたが、3人の学者がそれぞれの考へをかなり充分に出し合へたことは、何と言つても有意義なことであつた。

提題

認識論と神学に関連して

松 本 正 夫

デカルトは意識一般の自明性から出発して意識論哲学を建設したのに対して、聖トマスは存在一般の自明性から存在論哲学を形成する。ハイデッカーやヤスペルスなどの現代哲学もデカルト・カント以後の意識論哲学の流れのもとにあるので、そ